

や役割など、様々な宗教の要素を、人類が直面した環境問題に即して自然淘汰の過程の中で進化してきた心理的メカニズムによって説明する。死に対する認知的反応や認識を考慮に入れているとはいえ、主として関心はそうした具体的な環境適応問題や心理的なメカニズムの働きが宗教に与えた影響に向けられている。特筆すべきは、この学派では、死を人間が直面する実在的な問題として扱い、死関連の情緒的な次元も視野に入れていく学者がいることである。

TMTとRCTに関しては、来世を快適な場所、死者を再会の望ましい身近な存在と捉えるような有神論に偏った宗教概念が研究の背景に見られ、そうでない信仰には関心が及ばない問題がある。加えて、宗教において死への不安を煽る効果を認めたり、あるいは死に対する態度と宗教信仰の間に明確な相関関係が確認されないような実証研究を十分に参照あるいはそれに反論しないまま、宗教と死の関係に関する一般論に陥る傾向も見られる。また、EPのアプローチが、悲嘆及び死に関する宗教儀礼を説明しうるとはいえ、死の不安の多面性や具体的な人間の生き方への影響、死についての宗教思想などを考慮していないため、宗教における死の位置や機能についての説明としては、全体的に、不十分であると言えよう。したがって、宗教と死の問題に関するこうした研究には以下の諸点が求められるだろう。宗教信仰や実践の多様性をより強く意識し、自文化中心的な宗教概念を避けること。信者の死に対する態度について論じる際、必ず心理学的な実証研究を参考にすること。死体や死者に対する認知的反応、あるいは死への不安・恐怖といった、

ひとつの死の次元に議論を限定することなく、死の問題の多面性を認識し、また常に意識するアプローチを採用すること。そして最後に、一般的な宗教の説明を目指す上で、単独の理論のみを用いるのは難しいため、他理論とのさらなる融合を進める必要があると思われる。

心と脳概念性と実在

沖 永 宜 司

脳作用を統御する、脳を超えた意識を設定すると、この意識は物質ならざる何かとして謎になってしまう。合理的判断では脳作用を統御する自由意志が必要であり、脳と意識とは互いに協力関係になくはならない、という見解の問題点はここにある。反対に脳科学は、脳作用全体を統御する意識や、「私」という判断主体までを、全体が統一しながら部分がダイナミックに変動する、視床―皮質系内部の機能クラスターとして理解する。ここで脳以外の統御的な意識は必要なく、様々な脳作用の統御や判断、対象への価値付与までも脳自身によるものとされる。そこで意識は物理主義に完全に則り、原理的に決定論に従う。しかしクオリアや「私」までもが、あくまで物理主義的に理解される場合、一人称的な感じや意識の自発性は、説明不能な何か、非存在になるしかない。

そこで、物質ではない「もの」を設定せず、しかも主観性や自由意志をそのまま承認する方法が求められる。そのために、

「私」も物質としての脳も、実在そのものではなく概念的な記号であると考えてみたい。脳とは別の意識が背理になるのは、物質以外を存在から除外する思考形式があるためである。しかし物質のみを存在とすると、今度はその物質を考える「私」は、宇宙から除外されてしまう。「私」を物質以外の実在としても、反対に物質のみを存在としても、宇宙は謎になる。そこで、「私」または物質を存在と見なす思考形式以前に立ち返ることが妥当してくる。では、そこへはどのように接近したらよいか。

物理主義の特徴は、物として世界をすべて記述するが、そこに現れないものは最初より除外することである。脳機能や決定性は世界を完全に尽くし、そこに一人称的主観や、物理的決定性を観察する自己は、最初から除外されている。つまり、主観や自由の非存在が証明されたのではなく、最初から視界にならないう思考形式なのである。すると、これらはその形式の中で存在証明されるのではなく、まったく違った姿において認められるしかない。たとえば自然選択的な進化論の根底にも物理主義はあるが、するとなぜ私たちが、意志に基づく合理的判断を重んじるのが説明ができない。ここで自由意志は、物理主義の形式内に現われず、その形式以前にリアリティーを持つことになる。物質ではないものがあるかないかという問い自体、物理主義的フィルターの限定を通してという背理を持つ。しかし形式以前のリアリティーはこの限定以前なので、存在非存在の区別が成立しない。

この存在非存在の区別以前という主観や自由の性質は、知識

一般の相対化の根拠の消滅という観点からも捉えなおすことができる。事物の因果関係を説明するのが知識であり、また因果自体が必然的結合ではなく、習慣的な形成物だとすれば、知識は必然性を持たないことになる。しかし、こうした因果や知識の必然性を否定するメタな議論自体も、習慣的形成物であるとするなら、因果や知識は必然なのか、習慣にすぎないのか。このとき、必然とその否定とを二者択一的に区別する議論の枠組み自体が崩壊する。それは、必然性を否定し去るのではなく、二者択一の問いの枠組みを覆すことで、否定自体を無効にする。この問いの方が、実在を一定の思考形式に入れ込む限定にほかならなかつたからである。

宗教体験は世界が死んだ物質ではなく、すべて生きたものから成り立っているという気づきであると言われる。この気づきは、物質が生命かという二者択一の問いに対して答えが与えられることではない。それは実在を、物質が生命か、という択一的な形式において捉えていた思考の前提そのものの消去だからである。そこでは物質が捨てられて生命が選択されるのではなく、そうした区別自体が実在の矮小化であったことが気づかれる。そしてこの気づきは、この区別を設ける形式を通じて思考することは不可能だったのである。